

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第73号

平成30年8月7日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

頼山陽、日本外史で正行の「正四位下」記す 楠氏の大節は山河と並び存し、と称赞

日本外史は名分論の武士歴史書

7月の例会は「頼山陽と正行」を取り上げた。
竹原頼山陽顕彰会発行の「頼山陽」は、冒頭、「幕末から戦時中までのベストセラー『日本外史』の著者「頼山陽」は江戸後期の歴史家、書家、詩人である。」と紹介する。

扇谷は、かつて長尾剛著「日本外史―幕末のベストセラーを『超』現代語訳で読む」を読んだが、名分論に貫かれた武士の歴史書で、平氏から徳川氏に至る間の武家13氏を尊王論の立場からめった切りにする痛快な論調で綴られていた。

しかし、今回、頼山陽を取り上げたことで、長尾剛著作本の底本となった岩波文庫「日本外史」（上・中・下巻）を入手し、同書第二部『新田氏』前期「楠氏」を読むことで新たな発見があった。

頼山陽は、楠氏の事績をしっかりと論じており、その中で、正行が正四位下に叙され、検非違使・左衛門尉に任じ、河内の守を兼務した事を書いている。

竹原頼山陽顕彰会発行「頼山陽」によると、寛政12年1800、頼山陽20歳のとき脱藩するが、探索の上連れ戻され邸内の座敷牢に監禁をされた。3年後監禁が解かれた後、広島で「仁室」で謹慎し、この時、日本外史の初稿に着手した、とある。

続けて、何度も推敲を重ね、文政9年1826、山陽47歳にしてようやく完成をする。この日本外史は、山陽没後数年、天保7、8年ごろはじめて版本となり、筆写の苦痛を感じていた多くの人から争って求められるという盛況を呈し、明治32年までに14版も重ね、多い年には1万部以上、平均5、6千部を売り続けたといい、空前のベストセラー・ロングセラーといえる、と結んでいる。

渡辺橋～袖を断って首をつつみ

日本外史巻の五、新田氏前記楠氏の楠正行に関する件を

見てみよう。

正行に直接触れる件として、「吉野の行宮」「正行の北撃」「四條畷の戦い」がある。

●日本外史

〔吉野の行宮〕

～正四位下について～

帝、正成の王事に死せしを思ひ、正三位左近衛中将を追贈し、正行を正四位下に叙して、帯刀となし、遂に父の官を襲（つ）ぎ、検非違使・左衛門尉に任じ、河内の守を兼ねしむ。

〔正行の北撃〕

～渡辺橋の美談について～

頼氏の軍乱れ走り、渡部を過ぎて、溺るる者無数なり。京畿（けいき）震駭（しんがいはい）す。正行、溺卒五百人を援（すく）ひ、衣甲を与へ、礼してこれを遣（や）る。留まり仕えんと願ふ者多し。

〔四條畷の戦い〕

～偽首の件について～

「嗚呼、汝も亦た無双の国賊なり」と。己（すで）にして曰く、「その勇は嘉（よみ）すべきなり」と。自ら袖を断って首（こうべ）をつつみ、隴上（ろうじょう）に置き、復た進んで師直を索（もと）む。

〔楠氏論贊〕

楠氏あらずんば、三器ありと雖も、将（は）た安（い）ずくに託して、以って四方の望みを繋がんや。

…而してその大節は毅然として山河と並び存し、以って世道人心を万古の下に維持するに足る。これを姦雄迭（たがいはい）に起こり、僅かに数百年に伝ふる者に比すれば、その得失果たして如何ぞや。

足利氏、源氏より罪が重い

次に、足利氏論贊を見てみよう。

長尾剛曰く、「足利氏は国を混乱させた大義なき支配者」と一刀両断、そして、山陽は、「彼ら（足利市）は15代の



長きにわたって、一日として心休まる時はなかったであろう。これはまさしく、『建武の中興』事業掠奪という『天皇への謀叛』を犯した報いである。」と酷評する。

*巻の九足利氏正記足利氏

〔足利氏論贊〕

～源氏と足利氏を比べると、

〔吉野の行宮〕 帝の闕に還るや、尊氏已に新帝の弟を擁立す。これを北朝光明帝とす。帝に神器を伝へんことを請ふ。帝聽さず。尊氏、帝を花山院に囚へ、従行の者僧祐寛らを殺し、その余を拘執す。独り三条景繁のみ侍するを得たり。景繁、潜に計を進め、逃れて大和に幸せしむ。帝、夜、婦人の衣を服し、襖籠より出づ。扶けて馬に上せ、景繁、神器を荷つて従ふ。夜、方に黒し。赤電の路を照すに逢ふ。暁くる比、穴生に達す。景繁を遣して、吉野の僧宗信に諭さしむ。宗信は嘗て將軍護良を助けし者なり。ここにおいて、衆に先だつて来り迎ふ。正行聞いて大に喜び、従弟和田正朝らと馳せてこれに赴き、駕を護つて吉野に入る。河内・紀伊の將士相ひ踵いで来、衛り官軍復た振ふ。帝、正成の王事に死せしを思ひ、正三位左近衛中將を追贈し、正行を正四位下に叙して、帶刀となし、遂に父の官を襲ぎ、檢非違使・左衛門尉に任じ、河内守を兼ねしむ。ここにおいて、行宮を吉野に建て、四方に号令す。

〔正行の北撃〕 正行、金剛山に在り。漸く義故を保聚し、時に兵を撰津に出し、火を縱つて賊に挑む。正平二年(四七)秋、尊氏、細川頼氏をして、三千騎に將として来り攻めしむ。未だ金剛山に至らざること七里にして、止り舍す。正行の且に箭尾城を攻めんとするを聞き、其の山を離るるを欲つて、その後を絶たんと欲す。正行、謀してこれを知り、七百人を以て、行、聚落を火き、箭尾に向ふ為して還り、善田林に伏す。敵、火の起るを望み、輒ち山下に趨き、隊を亂して疾く馳せ、林を過ぐ。伏起るに遇ひ、大に駭いて敗走し、退いて天王寺を守る。山名時氏、六千騎を以て来り援ひ、住吉に軍す。正行曰く、「先づ時氏を破らば、則ち頼氏は戦はずして走らん」と。兵二千を分つて五隊となし、進んで住吉に向ふ。時氏、兵を分つてこれに當る。正行、北軍に塵起るを見て曰く、「敵、四処に陣して、衆、我に倍す。我れ兵を分つべからざるなり」と。乃ち復た五隊を合せて一となし、疾く行いて時氏の麾下を撃つ。時氏、劍を被り、走つて頼氏に歸す。頼氏の軍亂れ走り、渡部を過ぎて、溺るる者無数なり。京畿震駭す。正行、溺卒五百人を援ひ、衣甲を与へ、礼してこれを遣る。留り仕へんと願ふ者多し。

正行、遂に進んで京師に逼る。尊氏大に懼れ、乃ち二十余州の兵を發し、高師直を以て諸將帥を統べしめ、以て正行を撃たしむ。正行、弟正時と諸宗族を率ゐて行宮に詣り、中納言藤原隆資に因つて、上言して曰く、「先臣正成、嘗て微力を以て強賊を挫き、以て先帝の震憂を安んず。天下再び亂れ、逆賊四襲するに及び、遂に命を濫川に致す。臣、時に年十一。命じて河内に歸らしめ、囑するに余燼を収合し、國讐を報復するを以てす。臣、年已に壯なり。而も粟性風弱、常に念ふ、今に及んで力戦せず、待つあるの身を以て處るなきの疾に罹らば、上は不忠の臣となり、下は不孝の子とならん。而して今、賊の渠帥大挙して来り犯す。是れ真に臣が命を効すの秋なり。臣、彼が頭を獲るに非ずんば、臣が頭を彼に授けん。臣が生れ今日に決す。切に希はくは、一たび天顔を拜して行くことを得ん」と。隆資入り奏す。帝、簾を掲げて將士を臨視し、正行を前ましめ、これを勞つて曰く、「曩日の兩捷、大に賊勢を殺き、甚だ朕が心を慰む。朕、深く汝が世忠を嘉す。今、賊

- 一 箭尾城、善田林、河内内國。
- 二 二十余州、南海、山陰、山陽、東海、東山の諸國。
- 三 先帝、後醍醐天皇。
- 四 余燼、燃え残り、僅かに生き残つた一族。
- 五 待つあるの身、賊を滅せんと期している身。
- 六 兩捷、善田林、天王寺兩度の戦。
- 七 赤電、稲妻。
- 八 穴生、大和國、賀名生、穴生とも書く。
- 九 宗信、吉野吉水院の主。
- 六 その余、菊池武重、大徳院明、江田行義、守部宮公綱。
- 七 正行、正成の王事に死せしを思ひ、正三位左近衛中將を追贈し、正行を正四位下に叙して、帶刀となし、遂に父の官を襲ぎ、檢非違使・左衛門尉に任じ、河内守を兼ねしむ。

岩波文庫『日本史(上)』
楠正行の北撃

正行、身に箭を被ること蝸の如し。乃ち呼んで曰く、「已まん。賊の獲る所となるなかれ」と。正時と相ひ刺し、北に向つて斃る。年二十二なり。余兵皆自刃して、駢び斃る。和田賢秀は正朝の弟なり。独り敵卒に混じて、師直を同撃す。楠氏の卒湯浅なる者、降つて賊軍に在り。賢秀を識見し、後よりこれを斬る。賢秀眼を瞋らして湯浅を視る。湯浅懼れ、後、疾を獲て死す。正朝選つて状を奏せんと欲す。一賊あり。呼んで曰く、「独り亡びざるに忍びんや」と。正朝笑つてこれに返す。賊輒ち走る。かくの如くすること数とせり。

正行、頭を地に投げ、蹴且つ罵つて曰く、「唉、汝も亦た無双の國賊なり」と。已にして曰く、「その勇は嘉すべきなり」と。自ら袖を断つて首を裏に、隨上に置き、復た進んで師直を索む。その戦を望見して、これを追はんと欲す。正朝曰く、「彼は騎、我は歩、及ぶべからざるなり。伴り走つてこれを誘はんに若かず」と。乃ち残兵五十余人と、楯を負ひ以て北ぐ。師直肯て追はず。その裨將をして、数百騎を以てこれを尾撃せしむ。正行、大呼して返り戦ひ、走るを追ひ復た師直に逼る。相ひ去ること数歩なり。而れども、我が兵は農より晡に至るまで三十余合。力索きて能く起つなし。正行、目を師直に注ぎ、衆を勉めて前進す。敵これを連射す。正行、身に箭を被ること蝸の如し。乃ち呼んで曰く、「已まん。賊の獲る所となるなかれ」と。正時と相ひ刺し、北に向つて斃る。年二十二なり。余兵皆自刃して、駢び斃る。和田賢秀は正朝の弟なり。独り敵卒に混じて、師直を同撃す。楠氏の卒湯浅なる者、降つて賊軍に在り。賢秀を識見し、後よりこれを斬る。賢秀眼を瞋らして湯浅を視る。湯浅懼れ、後、疾を獲て死す。正朝選つて状を奏せんと欲す。一賊あり。呼んで曰く、「独り亡びざるに忍びんや」と。正朝笑つてこれに返す。賊輒ち走る。かくの如くすること数とせり。

鏡を悉して来る。真に安危の決なり。然りと雖も、兵の進退は、宜しきに從ふを貴ぶ。朕、汝を以て股肱となす。汝、其れ自愛せよ」と。正行俯伏し、泣を垂れて出づ。後醍醐帝の廟に辭訣し、族党百四十三人の姓名を廟壁に題し、然る後、途に上る。帝、隆資をしてこれを援けしむ。

- 一 廟壁、ここでは如意輪堂の壁板。
- 二 四采暖、河内内國。
- 三 繼、牽制すること。
- 四 その走路、正行のため。
- 五 師直の臣、上山高元。
- 六 裨將、高師冬を指す。
- 七 蝸、はりねずみ。
- 八 二十二、本文の記述では二十三に作るべきである。但し正行の年齢については異説が多い。
- 九 湯浅、太郎左衛門。
- 一〇 一賊、阿保忠実。
- 一 石川、河内内國。